

【参考資料】 獣害対策の考え方

森林の更新、特に植栽や天然下種更新の現場における課題として獣害がある。近年頻発している獣害の多くは、ニホンジカによるものが多いが、再生林などのために一度に広い植栽地を作るとウサギやニホンカモシカなどを呼び寄せて、大きな被害を生じることもある。

一般的に、ニホンジカの対策として重要な3本柱は、a 個体群管理、b 生息環境管理、c 被害防除、と言われている（鳥獣保護法及び鳥獣被害防止特措法等による解釈）。

そこで、低密度植栽箇所を含む周辺地域では、

- a 個体群管理 → 森林の管理者や間伐等を実施する造林事業者や森林組合等が捕獲を実施し、個体数を適正密度にコントロールする（管理する）。
- b 生息環境管理 → 大面積な一斉造林地等のニホンジカの餌場を造成せず、ニホンジカを一度に一箇所に集中的に誘引しない。
- c 被害防除 → 植栽木を防鹿柵などによりニホンジカ被害から守る。

の実施が望まれ、以下のa～cの順に説明する。

a 低密度植栽等による再生林の推進を図るニホンジカの個体群管理について

ニホンジカの地域個体群を管理（捕獲）せずに放置しておけば、生息密度は年々増加し、森林・林業地域だけではなく、周辺地域の集落や農地・公園区域にまで大きな被害をもたらす、農山村地域の過疎化と相まって大きな社会問題となる。

一般に、ニホンジカの個体群管理（ここでいう管理と捕獲とはほぼ同意語である）は、猟友会や狩猟クラブ等が実施する狩猟、市町村の要望を受け地元猟友会等が実施する有害鳥獣捕獲、公有林や公園区域等の管理行政機関が行う管理捕獲とに分けられる。また、捕獲手法は、大きく分けると装薬銃（散弾銃やライフル銃、麻醉銃等）による捕獲（第一種鳥獣捕獲免許が必要）と、わなによる捕獲（第二種鳥獣捕獲免許が必要）とに分けられる。

装薬銃による捕獲は、犬などを利用する追い込み猟（巻狩り：勢子と射手に分け複数人で行う場合が多い）、ハンターが歩いてシカを追い詰め捕獲するしのび猟（1～数人の少人数で行う場合が多い）、誘引を行い誘引箇所を転々と車などで移動しながら（若しくは隠れ場所で待ちながら）メス成獣などを選択的に捕獲するモバイルカリング（シャープシューティングも含まれる：誘引者・射手・捕獲個体運搬者・安全管理者等の複数人がチームを組んで実施する場合が多い）等に分けられる。

また、わなによる捕獲は、誘引を伴う箱わなや囲い柵、時には誘引を行うが基本的にはニホンジカの通り道にわなを仕掛けるくくりわな等がある。

くくりわなによる捕獲は、免許の取得がそれほど難しくなく、比較的的安全で経費もそれほ

ど掛からないので比較的容易に実施可能で、低密度植栽による再生林の推進を図る地域においては、森林管理者や森林整備者（林業事業者や森林組合等）が低密度植栽等再生林の実施と合わせてわなかけを行うと有効的である。しかし、くくりわなには警戒心の少ない幼獣や発情期のオス成獣が掛かる比率が高く、警戒心の強いメス成獣を数多く捕獲しないと、ニホンジカの個体群そのものを効率的に低減させることができない。そのため、メス成獣を含む複数頭の群れそのものを捕獲する囲い柵による手法や、安全に配慮しながらメス成獣を選択的に捕獲可能な装薬銃による捕獲等と同時進行的に実施することが有効的となる。

ただし、低密度等による再生林を推進する上で重要となるのは、対象地だけの被害防除を目的とするのであればcで後述する被害防除のみを行うことが多く、個体群管理（捕獲）までを一体的に行う事例は少ない。

将来的には、地域全体における再生林の針広混交林化の推進のため、再生林及び育林施業の実施と合わせて周辺エリアを含めた個体群管理（捕獲）を実施することが望ましい。

b 低密度植栽等による再生林の推進を図るニホンジカの生息環境管理について

大面積な再生林地（一斉造林地）等のニホンジカの餌場を一度に造成せず、一箇所に集中的に誘引しない等の生息環境を管理していくことが生息環境管理上重要となる。

ニホンジカは、林縁に好んで生息する動物であり、森林伐採や牧草地の造成、放棄され草原化した耕作地、法面等の緑化によって作り出された草地は、ニホンジカの餌量の多い環境を作り出し、個体数の急激な増加の引き金や高い増加率を維持する基盤となる。したがって、低密度植栽等による再生林の推進を図る場合も、このような環境を作り出さない工夫が必要であり、そのような観点から、規模の大きな伐採面（大面積皆伐地）や広く連続した再生林地を作らないことが重要となる。

c 低密度植栽等による再生林の推進を図るニホンジカの被害防除について

ニホンジカの被害防除は、防鹿柵（植生保護柵）を設置し対応を図ることが一般的である。

この防鹿柵（植生保護柵）は、ニホンジカが飛び越えられない高さ（1.6～2.0m程度）の網柵（針金や塩化ビニールネット、ステンレス線、魚網等様々な網柵がある）等で新植地を囲うものである。（表1参照）

表 1 低密度植栽による再生林の推進を図るための主な防鹿柵等

主な種類		概要	課題と成果及び対応
マンデ イフェ ン ス (単木 防除)	幼齢木 被覆ネ ット	植栽木1本1本を食害から 守るため、稚樹の単木1本 1本にネットやビニール 等を筒状に被せて覆う	作業のし易い植栽時に一度に設置できるので、 皆伐跡地の一斉造林地などに試験的に導入され ている。植栽木の初期生長に対する影響など未 定の部分もある。針葉樹の稚樹のように真っ直 ぐ上に伸びる樹種では適応しやすいが、横方向 に広く枝葉を展開する必要性のある低密度植栽 に適するかどうかは未定であり、評価が分かれ る。
	防鹿柵 (植生 保護 柵)	新植地を団地単位で一体 的(30~100m四方程度が 一般的)に防鹿柵で囲う	ニホンジカの絡まり等による柵の破損、暴風・ 豪雪・落石等による破損が生じると、そこから ニホンジカが出入りし数日で多くの被害が生じ ることがあり、管理上のリスクがある。まとま った面積に施工するので、稚樹1本あたりに換 算すれば、設置経費が安く経済的である。ただ し、ニホンジカの絡まりに対する見回りや豪 雨・豪雪後の見回り及びメンテナンスが必要。
ゾーン ディフ フェンス (面的 防除)	パッチ ディフ フェンス	植栽地の食害を小面積で 複数箇所単位で守るため、 狭い範囲(5~20m四方程 度)を複数箇所パッチ状に 防鹿柵で囲う	ニホンジカの絡まり、暴風・豪雪・落石等によ る柵の破損に対し、1箇所1箇所が小面積なので 一部への被害が生じても全体に被害が及ぶリス クが少ない。設置経費は比較的高いが、見回り やメンテナンス等の管理費を削減できる。
	ブロッ クディ フェン ス	痕跡や地形を見ながらニ ホンジカの歩く道を特定 し、それを筋状に残す形で (ニホンジカの通り道を 確保しながら)、通り道を 塞がないように防鹿柵を 張り、ニホンジカによる防 鹿柵の破損を防ぐ	ニホンジカの絡まりを事前に予防できる効果は 高い。ただし、暴風・豪雪・落石等による破損 に対してはリスクが残る。設置が複雑になりや すく、少し経費が掛かるが、ニホンジカの絡ま りに対する見回りやメンテナンス経費が軽減で きる。